

E.T.20周年アニバーサリー特別版のサウンド・エディター、アンディ・小山とのインタビュー

E.T.がドルビーステレオで公開されたのは1982年。スピルバーグ監督の傑作も20周年を迎え、そのアニバーサリー特別版がデジタルリマスターによるドルビーデジタル・サラウンドEXで上映される。そこで、ユニバーサル映画のサウンド・エディター、アンディ・小山に話を聞いた。聞き手はドルビーの映画営業ディレクターのアーティアガとハリウッド映画製作ディレクターのグリーンフィールド。

この種の企画を進めるには、何から手をつけるの？

●うん、第一のステップは再上映版の製作スタッフ全員でスピルバーグとオリジナルの映画を見直すこと。最初にして最大の課題は映像も音響も両方の観点から作品の統一感を損なわないことだ。オリジナル版をいつも参考にできるようにするね。

他の作品でも、例えば「ジョーズ: コレクター版」のDVDで、リバイバル版の経験があるよね。E.T.のリバイバルではどの程度オリジナル版の素材を使った？

●セリフに関しては、90%以上はオリジナルの素材で、後加工はほとんどしていない。効果音についてもオリジナルで使ったものはほとんど今回も使っているけど、デジタル音声とサラウンドEXの採用に対応して、何らかの整音をしている。忘れてはいけないのは、我々に課せられていることは作品のよりどころを損なわない仕事だから、行き過ぎは慎まなくてはいけない。オリジナルの音楽素材はショーン・マーフィーの監修の下に今回のプロジェクトに使用し、追加した場面についてはそれに合わせてジョン・ウィリアムスが新たに録音した。

今回が初めてのドルビーデジタル・サラウンドEX作品だけど、感想は？

●正直言うと、最初は多少不安があった。でもサラウンド音場とEXマトリックスでの作業を始めると、バックサラウンドが加わることで音の風景について立体的なコントロールがひとつ得られるというのは有り難かった。

何かドルビーデジタル・サラウンドEXの恩恵をハイライトするような特別なシーンとか、音の瞬間みたいなものがあれば・・・

●いくつかあるよ。でも特にひとつ挙げるなら、宇宙船が頭上通過するところを観客には注意するよう勧めるだろうね。サラウンドEXの効果はこれにはぴったりで、音を観客の後方に定位させてから、頭上を通過して前へ移動させることができるし、側面のチャンネルに音がこぼれない。通常の5.1映画館ではこぼれるけど、その点でも自分としては満足している。これは5.1デジタルとサラウンドEX間の互換性が優れているということで、映画館の対応がどちらでも、観客は良好な再現を体験できるということだ。

新版のミックスは映画にどんなインパクトがあると観客は感じるだろう？

●映画をもう一度観ようという人も、初めての人も、等しく感動体験を求めてくるわけで、そのためには何よりも映画館に基準レベルで映画の再生をお願いしたい。その音量で我々はミックスしたのだし、それが監督の意図なのだから。